歩くことの研究

Learning Again How to Walk

時空間デザインプログラム
13-15102　矢作理歩　Riho Yahagi
指導教員　土肥真人　Adviser　Masato　Dohi

第１章　序論

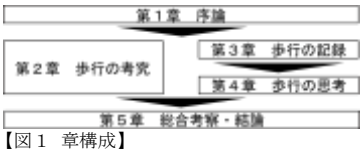
１－１　研究の背景と目的

我々は目的が明確であってもなくても毎日歩くし、近年空間整備の観点から歩行の重要性が見直されつつある。しかし、歩くことそのものの意義が議論の場にあがることは少ない。歩かれる空間や環境に目を向ける前に、まず歩くという行為自体を意識的に捉えなおす必要があるのではないだろうか。本研究においては、歩行をより意識的かつ実践的に把握し、その本質を見出すことを目的とする。

１－２　研究の方法と論文の構成

本研究では、行為としての歩行をより実践的に把握するため、実際に歩くことを研究方法として選択した。

章構成は【図１】の通りである。第２章では文献から歩行に関する記述を抽出、それらの考察により論点を整理する。第３章では実際に歩いた記録し、第４章では歩いた上で歩行について考えたことの分析を行う。第５章ではこれらを概括し、総合考察・結論を導く。



【図１　章構成】

第２章　歩行の考究

２－１　文献研究

本章では、歩くことについての記述を文献【表１】から抽出し、歩くことがどのような特性を持っているのかを探る。本章では、数々の文献を通しても語られずにいる「歩くこと」の本質を知る為にこれまでの言説をまとめるにとどめた。【図２】人間という生物が行う行動としての歩行から得られる特性と社会的な行為主体である人間の行為としての歩行から得られる特性に整理することができ、歩くということは自然的な要素と社会的な要素の両方を兼ね備える人間の在り方を体現したものであると考察できる。

【図２　第２章まとめ】

【表１　記述を抽出した文献】訳者・出版元は割愛

記述を抽出した文献
・ピーター・カルソープ (1995/2004 訳)「次世代のアメリカの都市づくり ニューアーバニズムの手法」
・今野博 (1980)「まちづくりと歩行空間 - 豊かな都市空間の創造をめざして」
・吉野正治 (1978)「人間のための都市の計画」
・ポリス・S・プシュカレフ / ジェフリー・M・ジュパン (1975/1977 訳)「歩行者のための都市空間」
・紙野桂人 (1970)「人のうごきと街のデザイン」
・クラレンス・A・ペリー (1929/1975 訳)「近隣住区論」
・B・ルドフスキー (1969/1973 訳)「人間のための街路」
・ヤン・ゲール (2010/2014 訳)「人間の街 - 公共空間のデザイン」
・ル・コルビジェ　(1946/1958 訳)「輝く都市」　・ロバータ・B・グラッツ (1993)「都市再生」
・厚生労働省健康局・静岡県袋井市 (2008)
「平成 19 年度国土施策創発調査 健康増進のライフスタイル形成支援・連携方策に関する調査」

２－２　本研究への糸口

人が歩くということに意識を向けることは、社会システムにガチガチに覆われたこの現代社会において、そこに生きる人間という生物的な存在に目を向け、人間的な都市を築くきっかけが生まれるのではないだろうか。

第３章　歩行の記録

３－１　歩行の概要

実際に体を動かして歩くこと、歩きながら歩行について考えることに主眼を置き、歩いた。そして、歩行後に歩くことについてさらに熟考した。つまり歩くことの歩行実験かつ思考実験を目的とし、歩いた。歩行の概要は【表２】の通りである。

【表２　歩行の概要】

実施者	都市計画を専門とする男女２名 ※第２章の文献研究をあらかじめ了解している
日時 経路	①2017.1.6　18:30 ～ 20:00 東工大～田園調布駅
	②2017.1.17 13:30 ～ 16:00 東工大～白金台駅
	③2017.1.19 13:30 ～ 15:30 東工大～若林駅前停留所
	④2017.1.24 12:30 ～ 14:40 東工大～蒲田駅
	⑤2017.1.28 12:30 ～ 15:00 東工大～渋谷駅
	⑥2017.1.31 14:20 ～ 17:00 東工大～日吉駅

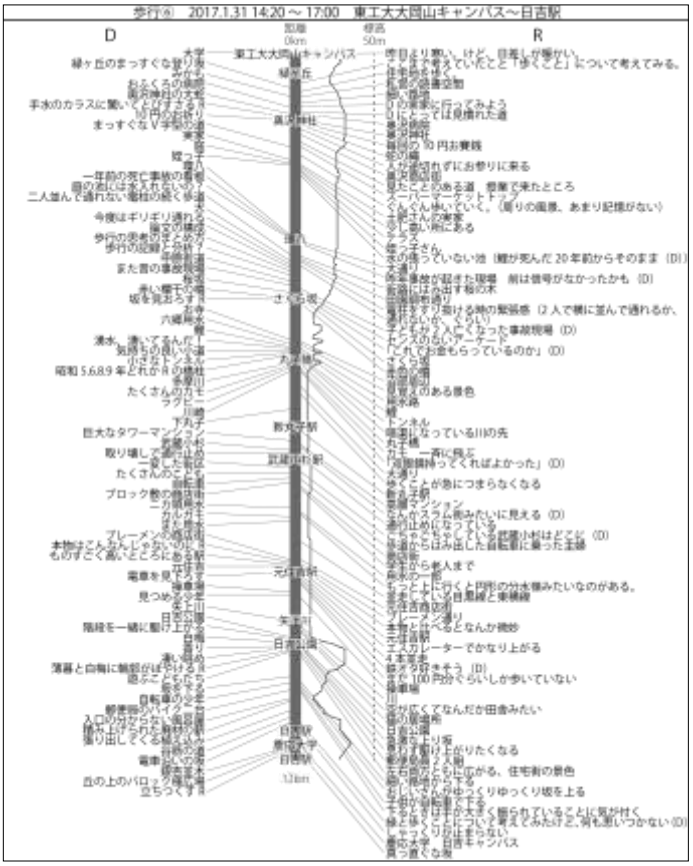
３－２　記録の方法

歩行終了後から翌日までに、自由記述形式で実施した歩行について記録した。

３－３　記録のまとめ　（歩行⑥のみ掲載）

＜歩行中【図３】＞歩行している時に見たもの、感じたこと、考えたことを、地点と距離・標高と共に記録した。

＜歩行後【表３】＞歩行が終わった後に歩くことについて考えたことを実施者が記録した順番のまま羅列した。



【図３　歩行中の記録】

【表３　歩行後の記録】

D	R
・緑と歩行の関係を考えようと思った。けどあまり考えられず… ・木は動かない、水の通り道、木があると水が通る 人は水を運ぶ、無駄は同じ ・森の中を歩くことは水の柱の中を歩くこと。蒸散した水蒸気と酸素の中を歩くことで、自分も蒸散している。 ・植物のない道を歩くのは砂漠を歩くのと同じ。水色は自然、人間だけ ・今回は木の中を歩かなかった？公園と大学くらいか？ ・自然の中を歩くことの意味。森の中を歩くことを想像すること、体験を振り返ること。 ・山歩き、田舎歩き、外国の都市歩き、その時間は何を感じているか？木と何かシンコペーションしているか？	・デモするときには歩く。 自転車とか自動車ではデモはやらない。スピードを持った瞬間に無害になってしまう ・歩くことは、画面の力になる ・男の人は散歩する。女の人は散歩をしない。散歩は社会的なつながり。男女で社会とのつながり方は違う。それらが散歩をするかしないにつながっている。 ・歩くことに慣れてきている ・疲れるのは、ただ歩くだけの歩行になっている時、周囲の様子が面白くない時。歩くことは身体を動かしているけれど、決してそれだけではない。

３－４　本章のまとめ

・６回の歩行を試み、歩行実験と思考実験の記録が取れた。
・歩くことで徐々に歩行や記録の枠組みが生まれていった。
・歩くことが認識されるのではなく、そこにあるものとして存在していることが、体感的にも思考からも確かめられた。

第４章　歩行の思考

４－１　本章の目的・４－２　分析方法

本章では、第３章より歩行後の思考を抽出し、KJ 法により歩くことについての思考構造を明らかにする。さらに明らかになった思考構造から歩行の在り方を熟思する。

４－３　分析結果（【図４】の黒四角を参照のこと）

結果として、３つに分類された。以下、詳細を述べる。

［Ⅰ：社会における歩行］歩行は日常的に無意識に行われるが、特別意識された行為として存在すると特化した目的が伴う。これにより、特化した目的を果たす他の手段と競合することとなる。現在社会において歩行は代替可能であり、劣位の象徴としても存在する。社会における歩行の意義を捉えた。

［Ⅱ：個人を獲得する歩行］歩行は多様で複合的な行為である。つまり、身体を動かしながら五感を研ぎ澄ませ思考を巡らせられる。こうして歩行を捉えると、案外人は独りの思考の中に思いを巡らせ、独りで歩いていることに気が付く。歩くことは個人を獲得する原初的で永続的な行為である。

［Ⅲ：世界とつながる歩行］歩いている間に坂や川などの自然、行き交う人々や街の様子などの社会を無意識であれ、意識的であれ認識した。また、自然からの恵みを頂き、文化として社会に必要不可欠である食との比較にも考えが及んだ。歩行は世界を実感し、世界とつながる行為だと捉えられる。

［Ⅰ：社会における歩行］×［Ⅱ：個人を獲得する歩行］
無意識と意思、目的の特化と混合・複合・多様という二つの対立項が見られた。本来であれば、意思をもって目的を特化し、無意識のうちに複合的なことをしてしまう。しかし、本分析では、無意識にしてしまう行為だからこそ特化した目的下でのみ意味をもつ行為となっている社会における歩行、意思をもって複合的なことをやることよって個人を獲得できる行為としての歩行を捉えた。

［Ⅱ：個人を獲得する歩行］×［Ⅲ：世界とつながる歩行］
個人と世界という対立軸が見られる。個人と世界の間に歩行という行為が架け橋となって存在しているということである。歩くことで、内なる自己と外なる世界の間を揺れ動き、個人・世界を獲得できるという示唆を得る。

４－４　本章のまとめ

・歩行後の思考を KJ 法によって分析した。
・分析の結果、３つの小分類が導き出された。
・小分類の関係性から、歩くことで、内なる自己と外なる世界の狭間を揺れ動き、個人・世界を獲得できるということが明らかになった。

第５章　総合考察・結論

５－１　本章の目的

本章では、これまで言葉で考えられ、示されてきた歩くことについての考察（第２章）と、実際の歩行を伴って熟思した末に出てきた歩くことについての思考（第４章）を概括することで、より実践的に歩くことの本質を捉えることを目的とする。第４章の分析の結果として出てきた歩くことの思考構造図に第２章の８つの特徴を分類し直した。【図４】さらに本研究の方法論として、実際の歩行を選択した意義を第２章と第４章の差異から明らかにする。

５－２　総合考察

［Ⅰ：社会における歩行］歩行を伴った思考では全く出てこなかった［４］［５］は、ポジティブな評価を与えている点で歩行を伴った思考と相対している。これらより、交通手段という機能としては、ある程度の地位が与えられている一方で、歩くという行為自体の意味は抑圧されていると考察できる。

［Ⅱ：個人を獲得する歩行］実際に身体を動かしていた際に身体を動かす［１］という視点が出てこなかった点は興味深い。歩くことは、身体的な動作としてではなく、我々の日常に存在しているということが示唆される。

［Ⅲ：世界とつながる歩行］［２］を社会や自然との接点を生むことの根拠になる要素として捉えた。第２章においては、「他の行動」を社会との接点としか言及していなかったが、実際に歩いたからこそ、自然との接点にも気づいたと言える。

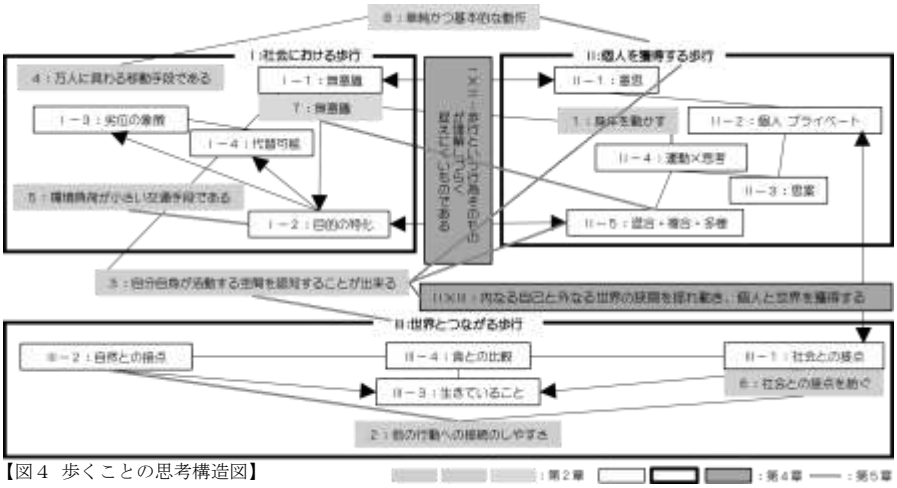
５－３　結論

1. 文献研究により、これまで論じられてきた歩くことについての記述を８点にまとめ、歩行とは自然的な要素と社会的な要素の両方を兼ね備える人間の在り方を体現したものと考察した。
2. 歩くことを実践的に捉えるために歩行実験かつ思考実験を行った。分析の結果、３つの小分類を得、その関係性により、歩くことで内なる自己と外なる世界との狭間を揺れ動き、個人・世界を獲得できるということが示唆された。
3. 実際の歩行を伴って歩くことを考えたことで、日常に主観的かつ複合的な行為として存在する歩行を捉えた。
4. 現代社会において、歩行は機能としてはある程度の地位が与えられている一方で、歩くという行為自体の意味は抑圧されていることが明らかになった。

５－４　最後に

本研究では、歩行とは、個人・世界を獲得する行為であるという考察を得た。これはすなわち歩行が個人と自然・社会とを行き来するペースを生み出すということである。我々が生きている時空間には部分としての個人、全体としての自然・社会が存在する。部分と全体、つまり個人と自然・世界を空間的にもそして時間的にもつなぐことが出来る歩行は、枢要な行為として位置づけられるべきである。

本研究では、現代社会の中において機能としての歩行にばかり目が向けられ、歩くという行為自体の意味が抑圧されていることが明らかになった。手段・機能としてだけではなく、個人・世界とつながっていると実感できる歩行が日常に溶け込むように都市空間や人々の認識を再構成していく必要がある。



【図４　歩くことの思考構造図】